アンラーニングプロジェクト09

2010. 1. 24

生・労働・運動ネット
富山市神通町3-5-3
TEL 076-441-7843
FAX 076-444-6093

ニューズレター

「オルタナティブ」:いま模索のとき
「私の、私・たちのオルタナティブ――その核心にあるもの」(09/11/29)での論議から

09年11月29日(日)、「アンラーニングプロジェクト09」後半期の第1回のプログラムとして、「『オルタナティブ』:いま模索のとき 『私の、私・たちのオルタナティブ――その核心にあるもの』」を行いました。以下、そこでの主な論議を紹介します。

□今、「オルタナティブ」への模索はどのような水準にあるのか

「『オルタナティブ』:いま模索のとき」では、まず、今回の提起者が、「オルタナティブという外来語が、本当に自分たちの『日常語』になっているのか?」といった問いを参加者に投げかけながら、「オルタナティブ」という言葉が、この国の社会運動の中で使われるようになってきた経緯や意味を振り返るという形で論議が進められました。"alternative"という英語の本来の意味は、「もう一つの、別の」という形容詞であると共に、「今あるものに替わるもの、代替物(案)」という名詞でもあるわけですが、オルタナティブという言葉がこの国の社会運動の中でそれなりの運動的な意味をもつものとして使われるようになったのは、80年代に入ってからで、それほど古いことではありません。

現在、社会運動の中では、このオルタナティブという言葉が、「今のようではない、もう一つの」という、現状への対抗的な意味合いで使われるようになっています。そのような、オルタナティブをめぐる論議の先駆け的な意義をもつものとして、80年代末に、北海道から九州まで全国を縦断して、日本がアジアの人々に対する「経済的侵略者」としてあるのではない、日本とアジアの民衆のオルタナティブな未来を考えあうことに向けた、「ピープルズ・プラン21」という大きな国際連帯イベントがありました。その総括会議が行われた水俣で、オルタナティブという言葉はどうも日本語としてしっくりこないという話になった時に、水俣病患者で漁師の浜本二徳さんという人が、「水俣弁ではそれは、『じゃなかしゃば』ということだ」という発言をしました。残念ながら、運動の世界でこの言葉が定着しているわけではありませんが、「じゃなかしゃば」というのはまさに、「こんなようではない世の中」ということで、オルタナティブという言葉を私たちの「日常語」として言い換えるのに相応しいものではないかと思います。

新自由主義(ネオリベラリズム)政策の「トップバッター」とでも言えるのが、アメリカのレーガンと、日本の中曽根、イギリスのサッチャーといった「ネオリベ3大将」とでも呼ぶべき、80年代の政治家たちですが、そのサッチャーが言った有名な言葉に、「社会というものはない」というのがあります。まさにそ

の言葉通りに、サッチャーは、労働組合といった社会的な絆や、社会保障を破壊していったわけですが、そのサッチャーのもう一つの有名な言葉が、「オルタナティブというものはない」というものです。それは、逆の方向からではありますが、私たちは、どのような意味でオルタナティブということを問題にするのかを考える上で、踏まえなければならないものの一つであるように思います。

数万人規模のデモでWTO総会を包囲して流会に追い込んだ99年の「シアトルの乱」や、「もう一つの世界は可能だ！」という有名なスローガンを掲げる「世界社会フォーラム」に象徴されるように、もう一つの社会のあり方を模索しようとする気運が全世界的に高まっていますが、この国の中でも、少しずつではありますが、そのような気運が広がりつつあるように思います。「ピープルズ・プラン21」を中心的に担った武藤一羊さんは、現在、「ピープルズ・プラン研究所」を主宰していますが、そこの若手の運営委員の人たちが中心になって、「オルタナティブ提言の会」がスタートしています。

その会の「発足のお知らせ」という参加呼びかけの文章の中に、「世界的な反グローバリズム運動の中から『もう一つの世界は可能だ』という提起がされてきましたが、日本でも、抵抗・反撃の闘いや連帯・助け合いの運動をしっかりと発展させること、そしてもう一歩その先に進むことが問われている」という一節があります。また、その「発足のお知らせ」の文章の中には、「オルタナティブの討論を集約するには、いろいろな形が考えられますが、自分たちの力量に応じて、もう少し手前の集約点を設定することが良いと思われます」という一節もあります。そのように、「もう一歩その先」と、「もう少し手前」という二つの言葉が、同時に言われているということが、この国での社会運動のオルタナティブをめぐる問題意識のありようを象徴しているように思います。

□「安心して暮らしたい」という願いを転倒させる「セキュリティー」の論理

以上のように、この国の社会運動の中でオルタナティブという言葉がもってきた意味を改めてたどりなおすことと併せて、「『オルタナティブ』:いま模索のとき」では、「こんな世の中であったらいい」とか、「自分はこういうことに疑問を感じる」とかいったような、参加者のそれぞれが日常的に感じていることや考えていることを重ね合わせることが、試みられました。

少し昔の話になりますが、90年代に、アンラーニングプロジェクトの「前身」にあたるようなものとして、私たちは、「富山自由学校」という自由な討論・学びあいの場を営んでいました。その話し手の一人である、川本隆志さんという倫理学の研究者が紹介してくれた話ですが、ある女性たちの集まりの中でどんな世の中であったらいいのかという議論になった時に、「女性が夏でも窓を開けて寝られる」ということや、「女性が夜中に町を歩くことができる」ということが出てきたそうです。その話が、自分たちなりのオルタナティブをどのレベルで考えるかということの一つの「例」として、改めて紹介されたのですが、それに対しては、とりわけ女性の参加者の多くが共感を示していました。

その一方で、ある参加者からは、自分が教員として勤務する小学校での「不審者対策」として、集団での登下校や、退職してもまだ体力的に元気な地域の老人たちが当番制で街角に立つ「街頭パトロール」が行われているという発言がありました。その地域には、いろんな事情から仕事に就いていない大人の人たちが何人もいるのですが、そのような子どもたちの安全に対する配慮が、結局、そうした人たちを「不審者」として排除したり、差別の視線で見ることにしかなっていないのではないかということでした。

また、精神障害者のための作業所に勤めている参加者からは、最近、そこに来るようになった男性の利用者から、相談を受けた話が紹介されました。その人は、作業所の行き帰りに知人にばったりと会って、病気のために働いていないことが知られることが怖くて、作業所が終わった後、夕方まで知

人の家に寄って時間をつぶしているそうですが、知人から何をしているのか聞かれた時に、どう答えたらいいだろうかという相談があったということでした。結局、その問題は作業所に来ているみんなで考えようということで利用者同士で話したそうですが、その作業所で内職として引き受けているある製薬会社の製品をつくっていると答えれば、ウソをついたことにならなくていいのではないかという結論になったということです。そのようなことを大まじめに論議していることに対して、思わず笑ってしまうような気分になる一方で、そのように何も悪いことをしているわけではない本人が卑屈な思いを強いられていることに、悲しくなってしまうということでした。そのような意味で、現在の世の中では、「女性が夏でも窓を開けて寝られる」ことや、「女性が夜中に町を歩くことができる」ことに対応するような、男性の側の「オルタナティブ」に当たるのは、「働き盛りの年齢の男性が、平日の昼間、大手を振って町を歩くことができる」ということになるのではないでしょうか。

今の世の中にはないが、こういうものがぜひあればいいと思うという意味でのオルタナティブとして、アンラーニングの学習会の中でもしばしば言及されている「ベーシックインカム」があるのではないかという発言が、今回の参加者同士での論議の中でありました。それは単に最低限の生存が保障されるということに止まらず、資本が簡単に国境を越えて安価な労働力を豊富に手に入れることができるような状況の中で、どれだけひどい労働条件であっても生存のために自分の労働力を「ダンピング」せざるを得ないという状態を変えるためにも、不可欠ではないかということでした。

その発言に対して、路上生活者や元路上生活者への支援に関わっている参加者からは、ベーシックインカム構想それ自体には反対しないが、単に生存のために必要なお金がないということよりも、路上で暮らすというところにまで追い詰められる中で、人間関係がすっかり欠落してしまうということが、そのような人たちが抱える問題をより困難化させているように思う、という発言がありました。そうした思いからも、最近、何度か報道されている「孤独死」の問題には無関心でいられないが、東京の公団住宅で行われているように、老人が社会的に孤立して生きている現状が放置されたまま、独居老人の「孤独死防止」のための住民組織をつくって「声かけ」をしましょうという発想には、違和感を覚えるということでした。

このように、安心して暮らしたいとか、自分と同じアパートに住む老人を「孤独死」させたくないという人々の自然な思いが、こうであればいいという世の中のあり方を描き出すことにつながるような、ある種のオルタナティブへの萌芽になるのではなく、「セキュリティー」の論理にからめとられて、より一層の排除や監視を招き寄せてしまうことへの危惧を、参加者の多くが共有していたように思います。

□夢見つつ深く植えよ――「もう少し手前」をどのように豊かにしうるのか

以上のような参加者同士での論議の後で、その前に言及されていた「オルタナティブ提言の会・発足のお知らせ」の中の、「もう一歩その先」と、「もう少し手前」という2つの言葉を自分なりにどのように捉えているのかについてもう少し補足したいということで、今回の提起者から改めて報告がありました。以下、その概要を紹介します。

「発足のお知らせ」の中で、「抵抗・反撃の闘いや連帯・助け合いの運動をしっかりと発展させ、もう一歩その先に進むことが問われている」と言われていること自体は、別に考え方として間違っているということではありません。そこにあるように、「抵抗・反撃の闘いや連帯・助け合いの運動」をちゃんと発展させることが本当にどこまでできるかが大事なのであって、そうすれば、「もう一歩その先」は自ずから展開されていくはずです。しかし、そこで言われている「もう一歩その先」というのは、そういう現

実の運動をどうつくるかということを飛び越えて言っているのではないか、という気がしてなりません。

アンラーニングプロジェクトは、昨年度から、「資本主義を見限る」ことをテーマとして進めてきました。アンラーニングの学習会でも紹介されたことですが、例えば、東京の「フリーター全般労組」は、ぼろぼろのアパートを借りて、その改築工事に組合のメンバーたちも加わって何とか住めるようにした上で、それを「自由と生存の家」と命名して自主運営を行っています。そのように、ただ認識のレベルで資本主義を見限るということだけではなく、市場原理や市場経済が貫徹しえないような自律的なスペースや空間を実際につくることができるかどうかということが、私たちに問われているように思います。もちろん、私たちは現実的には、この資本主義社会の中でがんじがらめにされていて、その外で生きるのは不可能なわけですが、それをほんの少しでもずらしてみたり、市場原理とは全く異なった原理や価値観で営まれている空間をどれだけ豊かに創り出せるのかということが、この国のそれぞれの領域での社会運動の大事な課題としてあるように思います。

そのような意味で、オルタナティブを考えるということの「もう少し手前」に、先ほどからの言葉を使えば、「抵抗・反撃の闘いや連帯・助け合いの運動」の中に孕まれている、いわば、「すでにある未来」の萌芽とでもいうようなものを、運動課題や運動組織の違いを超えて、どこまで相互に共有することができるのかということが、今、何よりも大事なことなのではないでしょうか。

オルタナティブということについてもう少し言うと、かって、反原発運動では、小さな規模ではあれ、水力発電や風力発電による自前の代替エネルギーをつくりだすということが実験的に行われたことがあって、それは間違いなく、その当時は、原発政策に対する批判的な意味をもっていました。しかし、今、「温暖化対策」ということが盛んに言われていますが、それは、温暖化を進めるような産業政策をせっせと行っていながら、その対策も「商売」のネタにするということですし、環境問題も含めて企業の金儲けに利用しようということに過ぎません。

そうなれば、いくら自然エネルギーということで、風力発電や太陽発電を持ち出してみたところで、現在の資本や国家に批判的な要素は何もありません。そのように、資本主義というのは非常に狡猾なもので、かっては対抗的な意味をもっていたものさえも取り込むことをするわけですが、そのように取り込まれてしまえば、結局、エネルギー政策のオルタナティブということではあっても、世界を変えることに向けたオルタナティブということには全くなりません。そのように、資本主義的な市場原理と常にきちんと対決するということを抜きにしては、オルタナティブということは育っていかないものだと思います。

難しいことではあるでしょうが、「資本主義を見限る」というのなら、それを現実的に具体的な行為として発現させなければ意味がありませんし、そのことの成果を実際にある空間の中で確保するということが、どこまで現実的にできるかが問われているように思います。ですから、「もう一歩その先」ということを言いたがる人たちに対しては、自分としては、「もう少し手前」が大事だと言いたいし、現状としてはそんなことを言うずっと前の段階ではないのかという思いもあります。

「アンラーニングプロジェクト０９」後半期――次回の予定

●第４回　２月２１日（日）午後1:00～4:00　サンフォルテ３０６号室

試考錯語：　全ての者の〈生〉の無条件の保障へ
――「生活保護制度」改革をさぐる